

- 河村幹夫『ドイルとホームズを「探偵」する』東京、日本経済新聞出版社、2009.
- 小林司、東山あかね『シャーロック・ホームズの推理博物館』、河出書房新社、2001.
- 小林司、東山あかね『シャーロック・ホームズの謎を解く』東京、宝島社、2009.
- シービオク, T. A. & J. ユミカー=シービオク『シャーロックホームズの記号論—C. S. バースとホームズの比較研究』富山太佳夫訳 東京、岩波書店、1994.
- 島高行「シャーロック・ホームズの魔術と詐術—二十世紀小説として『バスカヴィル家の犬』を読む」『実践英文学』62, 2010.
- 高山宏『殺す・集める・読む 推理小説特殊講義』東京、東京創元社、2002.
- 田中孝信「『四つの署名』におけるオリエントの誘惑」『人文研究 大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第59巻、2008.
- 角田信恵「アイリッシュ・フランケンシュタインと「赤毛同盟」: コナン・ドイルとアイルランド問題」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』50, 2011.
- 富山太佳夫『テキストの記号論』東京、南雲堂、1982.
- 富山太佳夫『シャーロック・ホームズの世紀末』東京、青土社、1993.
- 富山太佳夫『英文学への挑戦』東京、岩波書店、2008.
- 永松京子「探偵小説の変貌—Doyle から Christie へ—」『中央大学政策文化総合研究所年報』第3号、1999.
- 平賀三郎『シャーロック・ホームズ学への招待』東京、丸善株式会社、1997.
- 廣野由美子『ミステリーの間学—英国古典探偵小説を読む』東京、岩波書店、2009.
- ピアソン, ヘスキス『コナン・ドイル—シャーロック・ホームズの代理人』植村昌男訳 東京、平凡社、2012.
- マクドナルド, ロス『ミッドナイト・ブルー』小鷹信光訳 東京、東京創元社、2013.
- 宮地信弘「シャーロック・ホームズ—世紀末ロンドンの神話的ヒーロー—」『三重大学教育学部研究紀要』第50巻、1999.
- 山口和彦「伝説の幕開き:『シャーロック・ホームズの冒険』と『ストランド・マガジン』」『信州大学人文社会科学研究』4, 2010.
- ワグナー, E. J.『シャーロック・ホームズの科学捜査を読む—ヴィクトリア時代の法科学百科』日暮雅通訳 東京、河出書房新社、2009.

を果たしている。さらにワトソンは、ベル博士のように科学の実用性を示すような存在としてではなく、作者ドイルが経験してきた助手という立場から学んだ、常に寄り添って信頼を得て、相手の本音を引き出す特性をもった存在として描かれている。この2作の後、雑誌「ストランド・マガジン」に掲載されることになり、その物語は短編を中心に語られていくことになるが、短編の中では人物造形を行う余地がどうしても限られてしまう。いかにドイルの文体が短編に向くものであったとしても、短編ものだけでは、ホームズ物語の読者が抱いているようなホームズとワトソンに対する印象は生まれていなかったかもしれない。この2作を下敷きとして、人物像がある程度造形されていたために、ドイルは当時の人びとの要望に応えるように、短編でのホームズの活躍を描いたのである。

#### 一次資料

Doyle, Arthur Conan., *Sherlock Holmes: The Complete Stories with Illustrations from the Strand Magazine*. Hertfordshire: Wordsworth Editions, 2006.

Hodgson, John A. ed., *Sherlock Holmes: The Major Stories with Contemporary Critical Essays*, Boston: Palgrave Macmillan, 1994.

ドイル, アーサー・コナン 『詳注版 シャーロック・ホームズ全集1～10』 小池滋  
監訳 東京、筑摩書房, 1997～1999.

ドイル, アーサー・コナン 『わが思い出と冒険』 延原謙訳 東京、新潮社, 1994.

#### 二次資料

Belsey, Catherine., *Critical Practice*, London: Routledge, 1990.

綾目広治 「シャーロック・ホームズの推理とは？—近代の光と影—」 『ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編』 31, 2007.

植村昌男 『シャーロック・ホームズの愉しみ方』 東京、平凡社, 2011.

内田隆三 『探偵小説の社会学』 東京、岩波書店, 2001.

ウーズビー, イアン 『天の獵犬 ゴドウィンからドイルに至るイギリス小説の中の探偵』 小池滋, 村田靖子訳 東京、東京図書, 1991.

エンゲル, ユリオット 『世界でいちばん面白い英米文学講義—巨匠たちの知られざる人生』 藤岡啓介訳 東京、草思社, 2006.

オールティック, R. D. 『ヴィクトリア朝の緋色の研究』 村田靖子訳 東京、国書刊行会, 1993.

金子幸男 「ホームズと近代の監視・管理社会—フーコー的読解の試み—」 『西南学院大学英語英文学論集』 47, 2007.

たらした、という一節に続けて、「ドイルの物語にはポーのような深遠の探求も強烈な様式もない。ドイルの気分は穏やかにつろぎで、その目的は常に読者を安心させ、楽しませることである」(『天の獵犬』191)と述べているように、ホームズはポーの探偵デュパンとは異なったものとなっている。もちろん、それぞれの物語における名探偵自身の人物描写自体が、この物語の間の差異をもたらしている大きな要因であるのだろうが、いずれの物語においても、作者は物語中の人物としてその語り手を設定している。するとそこには、名探偵の活躍を記録するという役割は持ちながらも、物語中の人物として名探偵との関わりが生じてくるはずであり、その関係のあり方を見ていくことで、ワトソンに与えられた語り手以上の役割、人間性が見てとれる。

そこで、まず人物設定上目にとまるのは語り手ワトソンが医者であり、作者ドイルも医者の経歴をもつという点である。医者としてのワトソンにドイルが意図した側面をみていくと、ホームズとともに行動する活動的で教養を兼ね備えた姿が見てとれる。しかし、ドイルが学生時代に理想の医者像としてみた医術を実用的に用いるベル博士の姿がワトソンに反映されたというよりも、むしろホームズの側にその姿は反映されたようである。実用性という面はヒーローであるホームズに与えながらも、ワトソンには、その側に寄り添う立場に身を置き、信頼を得て観察を行う姿が見てとれるのである。

さらに、ホームズとワトソンを、作者ドイルの姿が投影された「名探偵／その非凡な友人」として見ていくと、二人にはドイルが分化して映し出されており、ドイルの姿はいずれにもみられるが、ホームズをヴィクトリア朝の社会不安を取り除くヒーローという存在としてみると、ワトソンには、当時の人びとの持っていた感覚を与え、読者に近い存在としての印象を与えている。そうすることでワトソンには読者の視点が付され、ヒーローであるホームズの類いまれな才能を際立たせると同時に、ワトソンの目を通して読者自身に近い存在としてホームズを認識することになり、結果、実在の人物のような印象を読者は持つことになる。

今回扱った2作は、ホームズ物語の初期の作品ということで、ドイルの恩師ベル博士をモデルとしたホームズが形づくられ、ワトソンはそのホームズの活動を記録するという語り手の役割を与えられながらも、ホームズの才能を引き立たせると同時に読者自身に近い存在のイメージを読者に与える役割

own particular profession, or rather created it, for I am the only one in the world.’  
 (The Sign of the Four, 98)

一つの精密科学としての探偵という仕事をするホームズは、自身を世界で一人の存在と称するが、これはワトソンも認めざるを得ない点であり、ホームズにとって好奇心を満たす刺激が不足している状況では、この類いまれな才能の持ち主を、犯罪にその才を使うことに向かわせないためにも、彼にとっての好奇心を満たす刺激の代用として、コカインの使用を、ワトソンは容認しているのである。つまりここでは、ドイルはワトソンの側に身を置き、医学を実用的に実践したベル博士を称賛したように、精密化学としての探偵を实践するホームズをコカインの接種を黙認することで称賛しているのである。

ここまでをみてみると、「名探偵／その凡庸な友人」であるホームズとワトソンに作者ドイルが投影した自己は、一方の存在に偏っているのではなく、双方に分化しているようである。そのうちワトソンに投影されているのは、ヴィクトリア朝の中流階級の人びとが最も大切にたとされる、家庭の感覚を備え、当時の社会に蔓延していた社会的不安を取り除いてくれるヒーローを待ち望み、物語中とはいえそれを体現したホームズを称賛する、という一般読者の視点であろう。その一方で、コカインの常用という一見健康とは正反対のものと思われる行為は、ホームズが優れた才能を犯罪のために用いることを避け、犯罪の代わりにホームズのコカインを満たす代用品となることで、ホームズ自身の健康体に近い精神的な安定をもたらすためのものである。そうすると、コカインの接種はその非健康的な側面よりも、ホームズに健康的な精神状態をもたらすものとして機能しているといえる。さらに、健康のためにスポーツを实践するというドイルの考え方は、社会の悪に立ち向かうヒーローであるホームズの側に付されたのである。

## 結論

「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定を用いて、その凡庸な友人に語りを担わせることを、初めて用いたのはポーであるとされる。その後、ドイルはこの形を用いてホームズ物語を書いた。しかし、ウーズビーが、ドイルはポーから出発点として細部を借りてきたものの、ポーとは違う結果をも

He[Holmes] was quiet in his ways, and his habits were regular. It was rare for him to be up after ten at night, and he had invariably breakfast and gone out before I [Watson] rose in the morning. (*Study in Scarlet*, 18)

というホームズの規則正しい生活がうかがえる描写に対して、

... , that I[Watson] rose somewhat earlier than usual, and found that Sherlock Holmes had not yet finished his breakfast. The landlady had become so accustomed to my late habits that my place had not been laid nor my coffee prepared. (*A Study in Scarlet*, 21-22)

というように、ワトソンはめずらしく早起きしたために、自分の朝食の支度が整っていない様子が述べられることで、自身の不規則な生活習慣をここで垣間見せている。さらに健康の面に関しては、ワトソンは従軍中の不慮の事故といえども、肩を負傷しており、“my[Watson’s] nerves are shaken” (*A Study in Scarlet*, 17) というように神経が弱り、健康体であるとはいえないようである。これらの描写から判断すると、ドイルの理想とした健康とその手段でもあったスポーツとの関連は、ワトソンの側よりもむしろホームズの側に反映されているようである。

しかし、『四つの署名』の冒頭と結末で示されているように、ホームズは、コカインの常用者なのである。現代であれば、法に罰せられるこの行為も、当時はまだその依存性が広く認識されておらず、違法とされていなかった。しかし、医者のだイルであればその負の側面を知っていたであろう。それにもかかわらず、ドイルはホームズにコカインを接種させている。それに対し、この光景を記録するワトソンは、医者としては抗議するものの、ホームズが注射を打ち終わるまでは、やめさせようとしなない。しかし、ホームズは言う。

‘My mind,’ he said, ‘rebels at stagnation. Give me problems, give me work, give me the most abstruse cryptogram, or the most intricate analysis, and I am in my own atmosphere. I can dispense then with artificial stimulants. But I abhor the dull routine of existence. I crave for mental exaltation. That is why I have chosen my

する記述が省かれていることは、作者が自伝の中で自身の親類について語る様子とは異なることから、親類に関して作者の自己投影がなされていないと考えられる。

だが、ワトソンに限ってみればどうであろうか。『緋色の研究』の冒頭においてワトソンが、医学の学位をとり、異国での医療活動中に熱病に倒れる、と述べている点からは、作者ドイルと似た経歴を持っていることが読み取れる。廣野は「そういう点からは、作者は探偵よりも、むしろ語り手、つまり探偵を眺める普通人のほうに近い立場に、身を置いているものと推測できる」（『ミステリーの間人学』99）としていることから、自己投影の要素が見てとれる。さらに、『四つの署名』の結末部分で、ワトソンはモースタン嬢との結婚をほのめかしているが、身内に不運のあった自分（たち）のクライアントであった女性との結婚に至るという点を見ても、ドイル自身、自分が診断を行なうも亡くなってしまう患者であった少年の姉、ルイーゼ・ホーキンスと結婚しているように、ドイルはワトソンの中に自分を重ねているようである。

これらの点から、作者は物語全体としてワトソンにドイル自身を重ねていることは確かなようだが、ドイルは一貫してワトソンの方のみに自身を重ねているのであろうか。作者ドイルは、『わが思い出と冒険』の中で、「スポーツの思い出」という章を割き、クリケットやボクシング、フットボールなどに関して述べているが、『緋色の研究』でワトソンがホームズの知識や能力を一覧表にまとめた中で、“Is an expert singlestick player, boxer, and swordsman” (*A Study in Scarlet*, 21) と記している。この点に関し、富山太佳夫は「すべて一対一で相手と対決し、作者の理想とするスポーツ精神が十分に発揮される種目である」（『シャーロック・ホームズの世紀末』194）としている。そうすると、作者ドイルはホームズの側にも写されているようである。さらにドイルは、「思い返してみると、私はスポーツに熱中した時間というものについて、何の後悔も残っていない。それは健康と力をもたらし、なによりも心のバランスを与えられたことである」（『わが思い出と冒険』318）という。富山もドイルの、健康とスポーツの関連について『シャーロック・ホームズの世紀末』で述べているが、この関連は、物語の中のホームズにも当てはまるようである。この健康に関する面について、物語中での、

る相手、信頼できる相手なのである。ドイルがワトソンに与えた自身の医者としての姿は、ドイルが師事したベル博士のような、科学の実用性を示す存在としてではなく、ベル博士のような存在のもとに寄り添う立場に身を置き信頼を得ながら観察を行い、ホームズの功績を語る、語り手であるようである。

## 2. ワトソンに映されたドイル

作者ドイルは、ホームズ物語において、「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定を用いているが、物語を通してこの設定は一貫しており、『緋色の研究』、『四つの署名』でもこの設定が用いられている。物語中で中心となるこの二人であるが、二人の人物を物語に設定していることから、作者ドイルは彼らのいずれかに自身のすべてを投影しているのではなく、平等にはなくとも、自己を二分し彼らに投影していると考えられる。しかし、後の作品において状況は変わるものの、物語の当初においては二人に共通した面も見られる。“I[Watson] had neither kith nor kin in England, and was therefore as free as air” (*A Study in Scarlet*, 14) と作品の冒頭で自身の境遇を述べているワトソンに対し、ホームズの方はこの二作品中、自身の親類に関する描写はない。二人は、共同で部屋を借りるという利害が一致し共に生活することになるのだが、それ以前の彼らは二人とも未婚の身ではあっても、親類との関わりに関する情報が皆無という点に関しては、「ヴィクトリア朝の中流の人びとが最も大切にたとされる〈家庭〉の感覚」（『シャーロック・ホームズの世紀末』19）を欠いているように思われる。身寄りのない独身という共通項を持ち、共に部屋を借りる相手を探している状況までは二人とも似ているような面があるが、ワトソンが旧知の人物であるスタンフォードを介してホームズと出会う場面から、二人の人物設定の構図は明確になっていく。しかし、二人がこの家庭の感覚を欠いている点を、作者ドイルの自己投影とみるのは難しいように思われる。ドイルは自伝『わが思い出と冒険』において、自身の生い立ちから、晩年の心靈学への熱中までを回想録として語っているが、その冒頭で彼は、風刺画家としてロンドンで評判を得たジョン・ドイルを祖父に持ち、パンチ誌の挿絵画家として活躍したりチャード・ドイルを叔父に持つ家系であると、誇らしげに語り始めている。そうすると、この段階では、ドイルによってホームズ物語においてホームズとワトソンの親類に関

「この事件で私は自信を得たが、もっと重要なことは他人の信頼を勝ち得たことだった。」(『わが思い出と冒険』37) さらに彼は捕鯨船の船医を含め、医者として助手のような立場で人に仕える経験を度々している。ベル博士のもとの経験もそうである。そのような場合に必要とされるもの、それが、このエリオット医師のもとの経験において学んだ、人の信頼を得るということであるとしたら、これはワトソンに医者としてのドイルが写した姿ではないだろうか。ホームズ物語において、なかなか他人に自信の感情を表さないホームズも、ワトソンの前では感情を表し、笑うという場面がよく見られる。

‘I shall never do that’, I answered; ‘you have brought detection as near an exact science as it ever will brought in this world.’

My companion flushed up with pleasure at my words, and the earnest way in which I uttered them. I had already observed that he was as sensitive to flattery on the score of his art as any girl could be on that of her beauty. (*A Study in Scarlet*, 34)

ワトソンからの賛辞に対して、思わず顔を赤らめており、他にも、

The instant he entered I saw by his face that he had not been successful. Amusement and chagrin seemed to be struggling for mastery, until the former suddenly carried the day, and he burst into a hearty laugh.” (*A Study in Scarlet*, 41)

といったようにワトソンを前にして笑っているのである。“Detection is, or should to be, an exact science and should be treated in the same cold and unemotional manner.” (*A Study in Scarlet*, 98) というホームズにとって、自分の探偵という仕事に関する事柄からは、感情的なものが取り除かれているのであり、女性に対する姿勢においても、ワトソンがモースタン嬢に惹かれ後に結婚するのとは対照的に、理性を邪魔するという理由で恋愛を排除してしまう。そのような中でホームズはワトソンに対し自身の感情を表出させているのであり、それほどまでにワトソンはホームズにとってこころを許してい

さらにこれに続けて、エディンバラ大学は他の大学に比べ実際の、人生の準備としては実際のであった、としている。当初ドイルの目には、エディンバラ大学で学ぶ医学に関する事柄は、実際のでなかったことになるが、そのような大学生活にあって、ジョゼフ・ベル博士に関しては、異なる認識を抱いていたようである。

それはさて私のあった人でもっとも面白い性格の人はジョゼフ・ベル博士であろう。この人はエディンバラ診療所の医師で、心身ともにきわめて非凡な人だった。(『わが思い出と冒険』 32)

ここでドイルはベル博士をもっとも面白いと評しているおり、自伝の中でベル博士に関する記述は、大学時代の他の教授に関するものと比べ、多くの分量が割かれており、その中にはベル博士と患者とのやり取りさえ記されている。このことから、ベル博士の診断の方法には魅力を感じ、特に実用性を感じていたようである。物語中においても、“it is the most practical medico-legal discovery for years” (*A Study in Scarlet*, 16)、“by this fresh proof of the practical nature of my companion’s theories” (*A Study in Scarlet*, 25)、といったようにドイルが実用性を意識したことばがしばしば目にとまる。しかし、以下に記されるように、このベル博士の像が投影されたのはワトソンではなく、ホームズであった。

私は旧師ジョウ・ベルのことを思い浮かべ、…。もしあの人が探偵だったら、魅惑的なのに組織的でないこの仕事を、精密科学の領域にまでもってきそうに思われた。(『わが思い出と冒険』 92)

ドイルが医者像として抱いたと思われる、実用的な医学を備えた人物はホームズの中に描かれた。ということは、医者という職業を与えられているワトソンには、ドイルの中にあった医者の姿は反映されていないのだろうか。

ドイルは、自伝の中で大学時代の出来事として、シュロプシャー州の町ライトンでの、エリオット医師のもとに助手として勤務していた際の経験を記している。医師が不在時の急患への対応の記述に続けて、次のように記す。

も、教養もあり、活動的で、冒険にも参加する、としている。とすると、語り手でありながらただの傍観者にとどまるのではなく、ホームズと行動を共にすることになることが、ここに見てとれるのである。さらに、ホームズと行動を共にすることは別の意味も持つことになる。『四つの署名』では、テムズ川でボートに乗り野蛮人を追いつめる場面において、ホームズと共にピストルを発砲し、野蛮人の発した毒矢で命を落としかねない状況を経験している。ドイルに語り手としての役割を与えられたワトソンは、常人とはかけ離れた思考の持ち主であるホームズと行動を共にすることで、自身平凡な存在として想定されながらも、一般の読者から見れば平凡とはいえない生活を送っているのであり、この点は、ドイルが自伝を書くにあたって、活動的な、という側面をワトソンに与えることになった理由かもしれない。また、ドイルがワトソンに意図した教養という面においては、ワトソンが医者というドイルと同じ職業を与えられていることに見てとれる。『緋色の研究』、『四つの署名』の二作の中では、ワトソンが医者として診断するという場面が描かれている。ここでは、ワトソンが医者ということばの意味においてのみの職業を与えられただけではなく、実際に診断するという医者の機能性を示すことになっている。教養を備えているだけでなく、実際に用いることができるのである。このように考えると、作者ドイルがワトソンに与えた語り手という役割は、物語中に登場する以上、ただの傍観者ではなく、ホームズと行動を共にし、非日常的な経験を共にし、実際に物語中の人物として機能しながら、ホームズを観察し記述することになるのである。

しかし、医者としてのワトソンを考えた場合に、ワトソンの中に医者であったドイルの姿をそのまま転写することはできないであろう。ドイルは自身の伝記の中で医学を学んだ大学時代を記しているが、入学した頃のことを以下のように記している。

入学したのは一八七六年十月のことで、一八八一年八月に医学生として卒業した。この期間にあきれるほど長きにわたって植物学、化学、解剖学、生理学、その他多くの必修科目を学ぶわけだが、その多くは治療術とは何の関係もないものばかりだ。今から思いおこしてみると、授業の全系統はきわめて間接的で、すこしも実用的なところがなかった。（『わが思い出と冒険』 30）

の2作品は、ホームズ物語が当時の読者から名声を得ることになる『シャーロック・ホームズの冒険』(*The Adventures of Sherlock Holmes*)の以前に書かれたものであるが、おそらくドイルは意図していなかったにしても、この後約40年もの間いわゆるホームズ物語は続いていくことになる。そうすると、ドイルがホームズ物語を書く際にこの時期に作り上げ、後の作品において用いられることになる様々な要素がこの時期の作品にみられると考えられるのである。そのような要素をひろいあげながら、ワトソンの語り手以上の役割、人間性を考えていく。

### 1. ワトソンに与えられた医者側の側面

ホームズ物語の第一作である『緋色の研究』は、作者ドイルが医者としてポーツマスで開業した後、診断の合間を縫って書いた作品の中の一作であるが、ドイルは、シャーロック・ホームズものを生み出す前の構想の段階のエピソードについて彼の自伝『わが思い出と冒険』(*Memories and Adventures*)で触れている。彼は自身の生涯についてこの本の中で述べているものの、ホームズ物語に的を絞った記述は自伝を構成する31章のうちのみならず1章のみであり、これ以外には他の章で所々触られているのみである。ホームズの構想に関する記述は、この的を絞った章の外でなされており、ガポリオやデュパンに着想を得たこと、大学時代の師ベル博士をモデルとすること、シャーロック・ホームズという名前の由来について書いた後、語り手のワトソンについて以下のように記している。

…名前というものはある程度その人物の性格を暗示するという基本的性質があつて調和がむずかしい。初めはシャープズ氏かそれともファーリッツ氏かとも思ったが、シャーリングフォード・ホームズにきめ、それからシャーロック・ホームズに改めた。自ら功績を語らせるわけにもゆかないから、引き立て役としてごく平凡な仲間を必要とする。教養もあり活動的で、冒険にも参加するし、それを物語るのだ。この見えをはらない人物のためには気どらない単調な名がよい。(『わが思い出と冒険』92-93)

ここに作者ドイルがワトソンに語り手という役割を与えたことが見て取れるのだが、彼はワトソンを平凡な仲間と記している。しかし平凡といいながら

デュパンとその友人、とも関連させて以下のように述べている。

探偵デュパンとその友人、あるいはホームズとワトソンの場合は、「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定で、「凡庸な友人」の第一人称による記述という形式をとる。この形式には、①第一人称の直接の語りによって事件の記述に臨場感を与える、②平凡人の眼によって事実関係を読者にも公平に提示し、探偵と読者のあいだの推理ゲームをフェアなものにする、③探偵の内面を自由に覗くことのできない謎めいた領域にし、探偵の超越性を担保する、といった利点がある。（『探偵小説の社会学』9）

語りの形式について、作者が上のような点を意図していたかは定かではないが、読者への効果を考えた際、これらの利点が存在するのは確かであろう。しかし、語り手という役割を担わせるためとはいえ、内田の記述にも現れているとおり、作者ドイルは「名探偵／その凡庸な友人」という人物設定を用いてホームズ物語を描いた。物語の登場人物として描く以上、語り手といえども、物語中の生活において名探偵との関係が生じることは避けられず、事実、物語の中では、ホームズとワトソンの共有の居間、という表現が用いられるほど、二人は関わりの深い生活を送っているのである。そうすると、作者ドイルが、ワトソンに語り手としての役割以上の役割・機能、人間性までもも与えているのではないだろうか。さらに、この「凡庸な友人」である語り手のワトソンは、「医学の学位を取り、異国での医療活動中、熱病に倒れ、帰国して開業医になるなど、ドイルと似た経歴の持ち主である」と廣野が述べるように（『ミステリーの人間学』98-99）、作者ドイルは、自身を重ねあわせるようにして語り手ワトソンを描いている部分があるようにおもわれる。

探偵小説を読む際、読者は「他人をとことん追いつめつつ自らはまったく無傷であるということ」を可能たらしめる文学上の装置」（『ミステリーの人間学』12）である探偵の活躍に注目しがちであるが、ホームズ物語における語り手であるワトソンの、語り手以上の役割についての分析を本論では試みる。その際、イアン・ウーズビーがホームズ物語の正典とされる60の作品を3つの時代に区分したうちの、第1期の作品『緋色の研究』、『四つの署名』（*The Sign of the Four*）を中心に考えていく（『天の猟犬』201）。こ

# *A Study in Scarlet*と*The Sign of the Four*にみる Doyleの側面

—語り手 Watson に注目して—

濱崎 建至

## 序論

アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) は、エディンバラ大学で医学を学んだ後、医者として開業するものの、その傍らで創作を行い、ホームズものの第1作『緋色の研究』(*A Study in Scarlet*)を1887年に発表することになる。一連のホームズ物語は、「ボヘミアの醜聞」(‘*A Scandal in Bohemia*’)以降の作品が1891年以降、創刊間もない「ストランド・マガジン」に掲載されるようになると、読者の好評を博していくことになるが、これは作者ドイルの生きた時代の様子を反映していたこともその一因にあると思われる。高山宏は、ホームズ物語が、死の意識の蔓延したヴィクトリア朝の状態にあって、必ず結末のある物語として許容することで死を許容する死の祝祭装置として機能した、としている(『殺す・集める・読む 推理小説特殊講義』21)。また、ホームズへの事件解決の依頼は、当時の最下層社会から上流階級社会まで、イギリス本土と大英国内外の国々といったように幅広い事象を扱っており、これは一つの事象がある特定の現実の中だけでは片付けられず互いに関連しあったものであることを、ホームズがあらゆる現実を行き交う存在として描かれることで示している。このことは、山口昌男が「道化=トリックスターの知性は、一つの現実のみに執着することの不毛さを知らせるはずである」(『知の祝祭』121)という意味において、トリックスターの道化をホームズが演じているとも考えられる。ホームズの演じる道化的役割が、当時の社会不安を取り除く存在として機能したことも、ホームズ物語が広く読まれることになった要因と考えられる。

そのようなホームズ物語にあって、物語はほとんどの作品が、ホームズに常に付き添って観察する立場である語り手ワトソンによる記述となっている。この点に関し、内田隆三は、エドガー・アラン・ポーが創造した探偵デ



- Brown, John Russell. *Tamburlaine the Great, Edward the second, and Jew of Malta*. London: Macmillan, 1982.
- Cole, Douglas. *Christopher Marlowe and the Renaissance of Tragedy*. London: Green wood Press, 1995.
- Grantley, Darryll and Roberts Peter. *Christopher Marlowe and English Renaissance Culture*. Menston: Scholar Press, 1996.
- Levin, Harry. *The Overreacher: A Study of Christopher Marlowe*, London: Faber & Faber, 1954.
- Tillyard, E.M.W. *The Elizabethan World Picture*, London: Chatto&Windus, 1943.
- Tromly, Fred B. *Playing with Desire: Christopher Marlowe and the Art of Tantalization*. University of Toronto Press. 1998.
- Spencer, Theodore. *Shakespeare and The Nature of Man*, London: Macmillan, 1942.

- アリストテレス、ホラーティウス、『詩学・詩論』（松本仁助、岡道男訳）東京：岩波文庫 1997 / 2007
- オウィディウス、『変身物語 上・下』（中村善也訳）東京：岩波文庫 1984 / 2009
- 北川悌二、『マーロウ研究』研究社 1964
- グリーンブラット、スティーブン、『ルネサンスの自己成型——モアからシェイクスピアまで』（高田茂樹訳）みすず書房 1992
- シェイクスピア、ウィリアム、*Hamlet* 東京：研究社 1963
- ティリヤード、E・M・W、『エリザベス朝の世界像』（磯田光一・玉川八州男・清水徹郎訳）東京：筑摩書房 1992
- 日本シェイクスピア協会 編、『シェイクスピアと演劇文化——日本シェイクスピア協会創立五〇周年記念論集』東京：研究社 2012
- バーバー、シーザー・L、『エリザベス朝悲劇の創造——マーロウとキッドの演劇』（ホイラー、リチャード・P 編注、三益隆一訳）東京：而立書房 1995

ルコ皇帝にもなれるという、当時の世界観から見れば、一見無秩序な世界を描いている。タンバレインの死によって物語は結末を迎えるが、中世以来の思想においては、秩序の回復には混乱を惹き起こした者への、神による劫罰が伴わねばならないので、彼の死はまさにこの考えに当てはまるように思われる。つまり、人間の身でありながら神をも越えようとしたタンバレインは、決定的に“Pride”の罪を犯していることになるのである。従って、彼は死によって己の罪を償うのだ。それはキリスト教の世界の理念そのままであり、マーロウの描いた作品は、異教徒の世界を描いていながらも実際には中世思想のキリスト教の枠組みを越えていないといえる。しかし、ルネサンス的な自己形成を目指した人物としてタンバレインを描こうとしたマーロウの真の意図は、そこにあったとは思われない。

タンバレインは死に瀕してもなお、地図を広げさせて未だ侵略していない地を示し、息子に侵略を指図する。人間は常に無限の可能性を持っていることを、当時の観客に示そうとしているように思われる。自分自身に与えられた運命に反抗し、上昇しようという人間タンバレインの姿を描くことによって、マーロウは自由な意思を持つ人間の創造を行ったのだ。

タンバレインは、与えられた身分・領分にとどまろうとしないだけでなく、自分の限界を自分で定めないという面で、典型的なルネサンス的な考えを持つ君主であったと結論することが出来るであろう。

## 註

- (1) 『詩学・詩論』 34-38pp 参照。
- (2) *Hamlet*, 2. 2. 286ff. 参照。
- (3) E.M.W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture*, Chatto & Windus, 1943, Theodore Spencer, *Shakespeare and The Nature of Man*, London: Macmillan, 1942 等を参照。

## 参考文献

### 1. Primary Sources

Marlowe, Christopher. *The Complete Plays*. Ed. by Frank Romany & Robert Lindsey. Penguin Books, 2003.

### 2. Secondary Sources

ある。それどころか、運命は彼に味方をしていた。

*Anippe:*

Madam, content yourself, and resolved  
 Your love hath Fortune so at his command  
 That she shall stay, and turn her wheel no more  
 As long as life maintains his mighty arm  
 That fights for honour to adorn your head. (*Part1. 5. 1. 372-376*)

第一部五幕一場でのアニッピーのセリフを見てとつても、タンバレインが運命さえも彼の意のままにできるということは、自他共に認めるところであることが分かる。

これは万人が持ち得る思想ではない。彼の側にいたゼノクレイトにしても、

*Zenocrate:*

I fare, my lord, as other empresses,  
 That, when this frail and transitory flesh  
 Hath sucked the measure of that vital air  
 That feeds the body with his dated health,  
 Wanes with enforced and necessary change. (*Part2 2.4. 42-46*)

というように、人間の肉体の儚さについて述べている。魂を吹き込まれた人間のかりそめの肉体の力は限られている。しかし、それこそがタンバレインの否定したかったものである。彼は、“Sickness or death can never conquer me. . .” (*Part2. 5. 2. 219-221*) と運命に対して抗い、これ以上の世界の征服を自らの死によって禁じられてしまうことを悔しく思っている。前述した通り、タンバレインは己の人間としての肉体によって禁じられているだけであり、彼の野心はその肉体を超えて広がっている。

## 結 論

マールウの描いた作品は、一生を羊飼いのままで終えるはずの羊飼いがト

中に “No talk of running, I tell you sir.” (*Part 2. 1. 2. 12-18*) などと、アルメダからたびたび中断させられ、朗々と語るができない。相手に懇願してやっと語ることができるのである。これに反して、セリダマスに対して説得を行うタンバレインは相手の中断を受けず、50 行にもおよぶ語りを一息に行う (*Part 1. 1. 2. 166-209*)。このように、語りの面でもタンバレインと他者との違いは明らかである。

こうして語るという点においてタンバレインをみてみると、彼は大いに語っている。王としての高邁な語り口を持っているのは確かである。さらに、タンバレインの言葉は説得力を持っている。なぜなら “Well said, Theridamas! Speak in that mood, / For ‘will’ and ‘shall’ best fitteth Tamburlaine, . . .” (*Part 1 3.3 40-41*) とタンバレインにふさわしい言葉とは何かについて語る際に、彼自身が自分にふさわしいと述べている “will” と “shall” はどちらも話し手の強い意志を表現する言葉である。自分にとっても自信のある人間だということが分かる。タンバレインに見られる特徴は、その言葉と語り口だけではない。タンバレインの語りには行動も伴うものだ。これまで口にしてきた大言壮語とも言える事柄をきちんと実現してきた。だからこそ説得力があるのだ。

タンバレインの運命観に関して言えば、彼のセリフには、運命、特に運命の女神がまわす車輪についての言及が随所に見られる。往々にして、運命というものに対して、タンバレインは強気である。彼は、運命の輪を自らの力で動かすことができるのだと考えている節がある。

*Tamburlaine:*

.....

I hold the Fates bound fast in iron chains  
 And with my hand turn Fortune’s wheel about,  
 And sooner shall the sun fall from his sphere  
 Than Tamburlaine be slain or overcome. (*Part 1 1. 2. 174-177*)

運命の三女神たちを鉄の鎖で縛り、それどころか彼女たちが回すはずの運命の輪を自分でもまわしてみせると言っているタンバレインは、神々に対して実に不遜な態度を取ってきたのだが、これまではそれが許されていたので

“/ Like his desire, lift upwards and divine;” (*Part1. 2. 1. 7-8*) というように、彼の容姿を語り始める。その長所はいずれも王となる為に作られているとコスロウは認める。堂々たる体軀は男らしさを示し、タンバレイン自身も自らにふさわしいのは、甲冑姿と半月刀という戦士の姿であると豪語する。戦いの場こそふさわしいと考えているのが分かる。

王としてふさわしくあるために必要なのは、見た目だけではない。その語りも王らしさを示すためには重要だ。たとえば、ペルシアの愚王であったマイセティーズが王としての語りを持ちえていないのは明らかである。第一部一幕一場にて彼は、次のように述べる。

*Mycetes:*

Brother Cosroe, I find myself aggrieved,  
 Yet insufficient to express the same,  
 For it requires a great and thund'ring speech,  
 I know you have a better wit than I. (*Part1. 1. 1. 1-4*)

現状を憂いながらも、自らの言葉で語るができないマイセティーズは、自分より語りに優れている弟の言葉を借りるのである。それだけでなく、常に側近のミアンダーの言葉を借りている。

王としての語りの部分が足りていたとしても、臣下の求める王としてはコスロウも足りていない部分もある。奪われた国土の回復のみに執心し、ペルシア王の座で満足しようとするコスロウには、王としての向上心は見られない。セリダマスもその点に不満を感じていたことを、“For he is gross and like the massy earth / That moves not upwards nor by princely deeds / Doth mean to soar above the highest sort.” (*Part1. 2.6. 71-73*) と語る。現状維持にのみに終始する王は、臣下の目から見て魅力的ではないのだ。

語の調子についてはどうであろうか。第二部にて、囚われのキャラピンは牢番であるアルメダを仲間へと誘う。その様子は、あたかも第一部においてセリダマスを仲間へ引き込んだ際のタンバレインのようである。しかし彼は “Ah, were I now but half so eloquent / To paint in words what I'll perform in deeds, / I know thou wouldst depart from hence with me.” (*Part2. 1. 2. 9-11*) というように、タンバレインほど語りが上手ではない。キャラピンは語りの最

コーランを焼き払わせた後に神殿を去る間際、気分の悪さを感じるタンバレインは、いよいよ死へと向かうことになる。表面上ではコーランを焼いたことに端を発しているようにも見えるが、単純にコーランを焼いたことへの不敬ということであれば、王位はタンバレインの息子に引き継がれずに終わってしまうだろう。しかし、タンバレインが王であることは神からは認されていると考えることができる。タンバレインは人間世界の頂点である絶対君主になることはできても、更にその上の領域にいる神を踏み越えることは人間である限り、その肉体的に許されていなかったのである。

タンバレインが人間の限界を越えていたことを示すのは、なによりもその死因だ。病床にあるタンバレインの尿を調べたところ、当時の思想に拠れば、万物は「火」、「空気」、「水」、「土」の四大元素から作られているとされたが、人間としての彼の体の中に存在する四元素のうちの火の元素が燃え尽きていたと御殿医は告げる。「火」は、上昇しているうちは彼の征服の原動力ともなるが、燃やすものがなくなれば彼自身の体を焼きつくすものにもなるのだ。

自らを神だと豪語していたタンバレインは痛みに苦しみ、自らが人間であることを否が応にも認識させられる。戦場で戦うことこそが苦痛を癒す特效薬と言うタンバレインだが (*Part2. 5. 3. 6*)、かつては勇壮であった言葉も、死の淵にあっては空元気としか聞こえない。いかにタンバレインであっても、彼が人間である限り死を克服することはできないのだ。ついに死の間際となると、自らの持てる力がすっかり衰退してしまったことを認め、タンバレインは退位して息子アマイラスにトルコ皇帝の位を譲ることを宣言する (*Part2. 5. 3. 168-176*)。

物語の前半では敵に打ち勝って、その死によって一気に上昇していったように、今度は自らを含めて、妻のゼノクレイト、そして子のキャリファスら近しい者の死によって段階を経て落ちていくのだ。

### 第三章 タンバレインの人物像

タンバレインの人物像について、まずはその外見から論じていく。劇中にもタンバレインの外見について言及する箇所が幾つかある。はっきりと他人が言及するのは、コスロウがメナフォーンにタンバレインの風貌と人物とを語らせる場面だ。メナフォーンは、“Of stature tall, and straightly fashioned,

える存在でなくてはならない。彼の息子は、みな彼と同じ見た目・資質を受け継いでいるはずであり、タンバレイン自身もそれを望んでいる。しかし三人の息子の見た目は母親ゼノクレイトに似ており、その上、性質までも母親に似ることはタンバレインが恐れていたところであった。次男と三男はタンバレインの理想に適う気性の持ち主であり、彼も満足する。ところが、長男のキャリファスは戦いに対し消極的な人間である。そればかりでなく、タンバレインの命令に従わないところも見てとれる。第二部四幕一場において、戦いに参加するようにと説得する弟たちの言葉にも耳を貸さず、テントの中で従者と共にカード遊びに興じる場面がその典型的場面だ。逆らう息子の姿を一度目と二度目は見逃したが、三度目となると、ついにタンバレインは我慢できずにキャリファスをその場で即座に刺し殺してしまう。このこともまた、長子相続や、中世以来の因習的思考方に反旗を翻す象徴的な行為と解釈できる。

タンバレインが息子殺しをするに至った理由は、以下の通りだ。キャリファスは、もはや支配する領土は充分であり、戦いは弟たちに任せて、自分は母ゼノクレイトの側にいたいと願ったり (*part2. 1. 3. 65-68*)、戦いの基本や築城術を説くタンバレインに対して、それは難しいと口答える (*part2. 3. 2. 33-34*)。これらのキャリファスの反抗的言い分は、タンバレインの最も嫌うものである。タンバレインの求める勇ましさは、そこにはない。王の長子であれば、いずれは次の王として期待をされて見られるものだ。タンバレインの息子として出来そこないで、王としてふさわしくないキャリファスは、父親であるタンバレインが自らの手で排除してしまう。生まれではなく、その人の有能さや資質で人を判断するタンバレインの考え方は、近代的である。

彼を栄光の終わりへと導くのは、この二つの死だけではない。第三の死はタンバレイン自身の死である。バビロンを侵略したタンバレインは、“Whom I have thought a god? They shall be burnt.” (*Part2. 5. 1. 175*) と聖典『コーラン』を焼き払わせる。これまで神をも恐れぬ所業を数多く行ってきたタンバレインだが、多くのイスラム教徒の血が流れてもタンバレインに対してなんらマホメットから罰が下ることもなかった (*Part2. 5. 1. 178-181*)。それゆえに、神それ自体の存在をタンバレインは疑問視している。存在するのなら復讐してみせよと述べるタンバレインは、神とマホメットに対して挑戦的である。

いは親世代から子世代へと移り変わろうとしているのである。必ずや老いる定めにある人間は、いつまでも最高潮の状態、つまり、運命の女神がまわす車輪の頂点に位置してはられない。同様にタンバレインの時代は、彼の望むと望まざるに関わらず、否応なく終わりに近づいているのだ。敵将から“proud Tamburlaine” (Part2. 1.1. 16) と呼ばれるタンバレインは、その奢る“pride”ゆえに追い落とされる運命にあり、これは人間である限り、逃れることができないものだ。さらには“death cut off the progress of his pomp / And murd'rous Fates throws all his triumphs down” と、第二部の前口上の示すとおり、第二部では主要な登場人物の死が目立つ。それらの死が契機となってタンバレインの栄光にも少しずつ翳りが見え始めることになる。

タンバレインの転落には、三つの死が大きく関わっていると考えられる。第一の死は、愛妻ゼノクレイトの死である。第二部二幕四場においてゼノクレイトは死の床につく。この死によってタンバレインは精神的に多大なる打撃を受ける。出会った時からゼノクレイトに対して、あたかも女神への崇拜ともいえる愛を捧げていたタンバレインであるから、彼は容易にその死を認めようとしな。ゼノクレイトは死んだのだという現実を示すセリダマスに対し、

*Tamburlaine:*

‘For she is dead’! Thy words do pierce my soul,

Ah, sweet Theridamas, say so no more.

Though she be dead, yet let me think she lives

And feed my mind that dies for want of her. (Part2. 2. 4. 125-128)

と答える彼の様子には、これまでのタンバレインらしさは見られない。ゼノクレイトを死へと導いた運命の三女神を地獄へと投げ込み、ゼノクレイトを奪った天に向かって進軍しようとしている彼の姿は、狂乱ともとれる。その後回復はするものの、そこでゼノクレイトが亡くなったラリッサの町を焼き払うのである。ゼノクレイトへの弔いの徴としての暴挙であるが、部下に示してしまった己の女々しさを炎でもって打ち消しているようにも見える。

第二の死は、彼の性格・気質を受け継がない長男キャリファスの死である。タンバレインの血を引き継いでいるキャリファスは、彼の写し身とも言

積できることを述べる。

*Bajazeth:*

Great Tamburlaine, great in my overthrow,  
Ambitious pride shall make thee fall as low  
For treading on the back of Bajazeth,  
That should be horsed on four mighty kings, (*Part 1. 4. 2. 75-78*)

このバジャゼスのセリフは、タンバレインの行く末を予兆していると言えるものだ。まさにこの“ambitious pride”によってタンバレインはいずれ終には身を滅ぼすこととなるのだが、ここではまだ上昇機運に乗ったままだ。

バジャゼスをこのセリフにある通りまさに踏み越えて、タンバレインはトルコ皇帝の玉座につき、ついに Great の称号を得ることになる。かつてはピラミッド型に固定された身分制度の底辺に位置するただの羊飼いであったタンバレインは、自らの力によって、この世俗世界ではその頂点に位置するトルコ皇帝の座まで上りつめたのである。それだけでなく、愚かな王マイセティーズ、王としての資質は持ちながらも向上心の足りないコスロウ、王としての資質と向上心のどちらをも兼ね備えているバジャゼス、この三人を乗り越えたタンバレインは名実ともに人間としては地上世界の頂点に立ったと言える。

相次ぐ勝利と強敵の死を乗り越えてタンバレインの身分は皇帝となった。この後、さらにはゼノクレイトとの結婚が控えている。タンバレインの眼の先には輝かしい栄光しか存在しないように思われる。このように、この劇の第一部では上昇していくタンバレインの姿を一途に描いているのだ。

## 第二章 下降するタンバレイン

第一部と第二部とでは作品の雰囲気が大きく異なっている。第一部では、敵との戦いに勝利し、どんどん身分が上昇していくタンバレインだが、第二部ではタンバレインがその座を狙われる立場となるのだ。牢に捕えられていたバジャゼスの息子キャラパインが牢番アルメダと共に逃げ出し、敵としてタンバレインの前へと立ちはだかる。キャラパインの目的は父バジャゼスの復讐だが、彼の蜂起は、同時に世代の交代を少なからずイメージさせる。争

Nature, that framed us of four elements  
 Warring within our breasts for regiment,  
 Doth teach us all to have aspiring minds,  
 ……  
 Wills us to wear ourselves and never rest  
 Until we reach the ripest fruit of all,  
 That perfect bliss and sole felicity,  
 The sweet fruition of an earthly crown. (*Part 1. 2. 6. 58-69*)

ここで飛翔する人間の精神についてタンバレインは述べる。自然と同じく四大元素で作られている人間は高みを目指し、向上すべきものである。そしてその結実として“earthly crown”へと到達する。ここで実際にタンバレインが指しているものはペルシア王の王冠であるかもしれないが、全アジア支配に目を向けているタンバレインにとって、“earthly crown”とは地上すべてを統べる王が手にする王冠のことであるといえる。運命とか定めとかに依らずして、自ら戦って自らの力で王冠を勝ち取ったタンバレインは、ペルシア王として王冠を自らにふさわしい物としてその頭に戴く。まさしくその点において、血筋とか家柄によって自ずと王とされたマイセティーズの場合と大きく分岐する所なのだ。そしてタンバレインの目はまだずっと先を見つめている。トルコ皇帝の座である。

第一部三幕一場で、ついにトルコ皇帝バジャゼスが登場する。“the high and highest monarch of the world” (Part1 3. 2. 26) と自負する通り、配下に多くの王たちを従えるバジャゼスは、タンバレインにとってまたとない強大な敵とも言える。一方、バジャゼスにとってタンバレインは、今はペルシアの王であるとはいえ、元は羊飼いなというしがない身分の男である。ところがタンバレインは、バジャゼスに対し“lord”の敬称を用いて呼ばない。トルコ皇帝ですらタンバレインにとっては敬意を払うべき強大な敵とは映っていないのだ。

激戦の末バジャゼスを倒したタンバレインは、支配者として語り始める。彼の妄想的支配欲は今や大いに膨れ上がり、アジアのみを征服するに飽き足らず全世界へと向けられている。(Part1. 3. 3. 244-260)

これに対して、敗者となったバジャゼスは、次のように負け惜しみとも解

葉に対し、「王であることは半ば神であることだ」と、ユーサムキャセインは簡潔に述べる。また、「神は王ほど輝かしいものではなく、神が天上で得る喜びは地上で得られる喜びとは比べ物にならない」とセリダマスも述べる。神よりも王の方がより偉大な存在であると配下の者は認識している。ここには、超越的な存在より、現世的な存在の方を重要視する、無神論的な思想が窺える。しかし王にとって肝心なことは、王の偉大さではない。王になれる機会が巡ってきた時に、どう行動するかである。タンバレインはその事実に気付いている。「なれるとすればどうするか」というユーサムキャセインの問いに対し、タンバレインは、ごくまれである王位を篡奪する好機にまさに今立ち会っているというのに、それを逃すべきではないと考えている。その大きな理由は、彼の上昇志向にあると考えられる。タンバレインはいかなる時も自分の現状に満足しているとはいえない。常に上を目指し、一定の身分にとどまろうとしていないからこそ、彼は身分の枠組みから解き放たれた自由な存在であるといえる。

さらに重要なことは、こうした好機に立ち会えるかどうかである。はからずもマイセティーズのタンバレイン討伐という命令が配下の部将セリダマスの寝返りを招き、さらには弟コスロウがタンバレインと手を組み、王位を追われるという現在の状況を生み出したのである。加えて、王位が長子ではないコスロウへ移行しようとしているという不安定な状況である。そのような絶好の機会に巡り合えたからこそタンバレインは、羊飼いやから国王となるという妄想を抱き、それを実行に移そうと考えることができたのだ。

タンバレインはコスロウが王位につくのを助け、コスロウの凱旋後は摂政につくことが約束されてはいる。しかし彼はその地位にとどまるレベルの人間ではないし、そもそもコスロウへの忠誠心など持ち合わせていないであろうことは想像に難くない。また、ペルシアの王座を手に入れたコスロウが最初にやろうとしていることは、ペルシアの国土回復である。タンバレインにとって、コスロウの視野・度量の狭さは、王としての器に欠けるものである。ゆえに、度量がはるかに大きく、優れた能力・資質にたけたタンバレインは、容易にコスロウを裏切るのである。

*Tamburlaine:*

.....

一口には潜んでいたと考えられる。マイセティーズは、配下の軍隊で最高の部将であるセリダマスに部隊を預け、タンバレイン討伐の命を下す。しかしタンバレインと対面したセリダマスは、もっと大きな軍隊を統率できる器だと説得される。その誘いの言葉にセリダマスは自ら仕える王を裏切り、タンバレイン側につく。その後タンバレインはセリダマスを通じて、コスロウと共にマイセティーズを打倒すべく手を組むこととなる。マイセティーズを倒したのちはコスロウを王位につけることにタンバレインも承諾し、両者は連合して軍を結成することになる。

タンバレインとコスロウの連合軍はマイセティーズとの戦いを開始するが、第一部二幕四場の戦場の場面で、マイセティーズが穴の中に王冠を隠そうとするところにタンバレインは居合わせる。自らの王冠を取られまいと、マイセティーズが戦の最中に王冠を隠そうとしている喜劇的な場面であり、彼が愚かな王であることを観客・読者に印象付けるシーンでもある。この場面は、中世的な考え方を持つマイセティーズと、ルネサンス的な考え方を持つタンバレインとの対峙であり、両者の大きな違いが現れる。タンバレインはマイセティーズを自らにとって強大な敵ではないと認識し、この場では王冠を奪わずに去る。しかし、それは決して彼が王位への興味を持っていないことを示すものではない。王冠は戦って奪ってこそ意味があると考えているのだ。

彼の心が王位篡奪へと傾いていくのは、次のシーンでも明らかだ。

*Tamburlaine:*

‘And ride in triumph through Persepolice’!

Is it not brave to be a king, Techelles?

Usumcasane and Theridamas,

It is not passing brave to be a king,

And ride in triumph through Persepolice? (*Part I. 2. 5. 50-54*)

タンバレインとコスロウの連合軍はマイセティーズに勝利する。コスロウを褒めそやすメナフォーンの“*And ride in triumph through Persepolice*”という直前の言葉をタンバレインはそのまま繰り返す。そればかりでなく、セリフの最後にもう一度配下の部将へ問いかけとして口にする。その問いかける言

つめるといふ、本来は不可能とも思われることを次々と実現させていくその過程を辿っていく。第二章では、本劇第二部の後半において描かれる、いわば下降していくタンバレインについて、その経緯を論じる。第三章ではタンバレインの人物像について、周囲の人間と比較しながら論じる。結論ではこれらの検討を踏まえ、『タンバレイン大王』におけるタンバレインの君主像を探りたい。

## 第一章 上昇するタンバレイン

『タンバレイン大王』第一部は、羊飼いであるタンバレインが大王となるまでの過程を描いている。タンバレインの前にはマイセティーズ、コスロウ、バジャゼスという三人の君主が越えるべき敵として立ちはだかる。これに対するタンバレインといえば、いずれはアジアの支配者となるという大きな野望を抱いているものの、ペルシアの辺境を荒らしまわる羊飼いであり盗賊にすぎない。しかし野心を持ち、常に自らにとって強大な敵を求め戦うタンバレインにとって、所詮、マイセティーズらは行く手を阻む敵とはなり得ない。

劇中でタンバレインが初めに得るのはペルシアの王座だ。しかし最初にペルシアの王位篡奪を狙っているのはタンバレインではない。ペルシア王マイセティーズの弟コスロウが兄を倒し、その座を手に入れることを、配下のメナフォーンらと共に画策している。何故なら、現在のペルシア王であるマイセティーズは賢王ではない。マイセティーズの治めるペルシアはかつてとは違い、強固な国ではなくなってしまった。その上、愚王マイセティーズは、盗賊が自国で略奪を働いていることを愚痴をこぼして嘆くのみだ。マイセティーズは王としての資質を満たさない王であるがゆえに臣下の不信を煽り、より一層王位を狙われることになるのだ。

しかしマイセティーズが王である以上、命令を下された臣下はどんな命令であれ遂行するより他はない。マイセティーズは、中世からの因習により、王の長男であるがゆえに、王としての資質の有無にかかわらず、王として君臨するが、高い身分にふさわしい資質に恵まれている者が、その身分に就くべきであるというのが、ルネサンス的考え方であった。その意味で、より優れた能力・資質に恵まれた者が、生まれた階級や身分を超えて、より高いものを目指すのは、自然なことであるとの思想が、タンバレインを造形したマ

1717 - 1797) の『オトランド城』(*The Castle of Otranto* 1764) においても同様だ。本来のオトランド城城主であるアルフォンソから城主の座を篡奪した家来の孫にあたるマンフレッドは、代々伝わる「真の城主がその城より巨大になった時、オトランドの城と城主は現在の城主から返還されるべし」という不吉な予言の存在に内心怯えている。しかし、結局マンフレッドが予言を逃れようとして行った行動の全ては裏目に出て、城主の座は正当な城主アルフォンソの子孫であるフレデリックの元へと戻ることとなる。

一方、シェイクスピアと同年に生まれたクリストファー・マーロウ(*Christopher Marlowe*, 1564–1593) の『タンバレイン大王』(*Tamburlaine the Great I, II* 1587-88) において、タンバレインは初めから王として登場しないし、王となるべく予言を与えられたわけではない。第一部におけるタンバレインは、ペルシアの国境を荒らし回るスキタイ人の羊飼いである。本来であれば羊飼いの子として一生を終えるはずのタンバレインだが、彼の野心を反映しタンバレインの身分は羊飼いのままでは留まらない。まずはペルシア王の弟と共謀してペルシア王を倒し、さらにはその王弟をも欺いてタンバレインがペルシア王となる。やがてタンバレインの悪名は、当時、全世界を統べていたと言ってもいいトルコ皇帝にまで届く。やがてトルコ皇帝の率いる軍勢との戦いに勝利し、トルコ皇帝を捕囚とした後、タンバレインはトルコ皇帝その人を踏み台とし、文字通り乗り越えてトルコ皇帝の座へとつくこととなる。

キリスト教社会において、神によって定められた身分の枠を越えることは、“Pride” という七つの大罪のうちでも最大の罪を犯すことになることと定められていた。万物は、いわばピラミッド型に神を頂点とする序列に従って作られていると信じられていたからである<sup>1</sup>。しかし、そうした中で、マーロウが生きたルネサンス期になると、神中心の中世キリスト教思想の厳格なタガは外れ、人間に無限の力が与えられ、神にさえも近付けるという危うさを持った個人という考え方が誕生する。タンバレインは、まさにハムレットが人間賛美のセリフで語るような<sup>2</sup>、この自由で無限の個人である。『タンバレイン大王』においてタンバレインの枠を定める予言は存在しないが、神や運命に従順であるとは言えないタンバレインの姿は繰り返し描かれる。

本稿の第一章では、ひたすら上昇して上へと向かう本劇第一部のタンバレインについて論じていく。羊飼いであるタンバレインが、皇帝にまでのぼり

# 『タンバレイン大王』にみる君主像

山田 佳子

## 序 論

古来より運命から逃れようともがく人間の姿は描かれ続けてきた。ソフォクレスの『オイディプス王』において、神託を受けたオイディプスの父ライオスは、「男子をもうければその子によって殺される」という予言から逃れようと画策するが、数奇なめぐり合わせによって自らの息子オイディプスによって殺される。一方、故郷へ戻れば両親を殺すとの神託を得ていたオイディプスは、育ての親を実の親と思い込んでいたために、その育ての親を害することを恐れ放浪の旅に出ていた。しかし前述の通り、知らずして父親を殺し、その上、王である父親を殺したことで混乱したテーベの国を救うために先王の妃である実の母親を妻としてしまう。さらにオイディプスは、知らずして妻となった母親との間に二人の男子と二人の女子をもうけるが、アポロンの託宣により知らずも全ての真実を知った母親が自死することで、自らに与えられた予言が成就してしまうことになる。

このように、かつて人間は予め定められた運命の前では無力とされていたし、オイディプスのように力強く高貴な人物が己の判断の誤りによって没落する劇を『詩学』においてアリストテレスは悲劇と定義した<sup>1</sup>。

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の『マクベス』(Macbeth 1606) において、マクベスは「いずれ王になる」という三人の魔女たちから聞かされた予言に惑わされ、自らの仕えるスコットランド王ダンカンを殺害し自らが王位につく。しかし王妃となったマクベス夫人は血に汚れた己の手を幻視するなど次第に精神を病み、マクベス自身も予言の力に逆らうことができず、結局は、予言通りに殺されてしまう。キリスト教思想では、人間は天から与えられた身分の枠を超えることができないと考えられていたが、その流れに逆らおうとする人間は見えざる力によって死という正当な結末へと押し返されることになる。シェイクスピアから時代を下った、政治家であり小説家でもあるホレス・ウォルポール (Horace Walpole,